

有識者会議の報告書の構成イメージ(たたき台)

有識者会議の役割

- 川辺川ダム問題についての知事の姿勢
「川辺川ダム問題」は早急に解決すべき課題。
周辺住民や県民の意見、国交省や県議会の考え方、有識者会議の意見や自身の現地視察等を踏まえ、9月定例熊本県議会で、川辺川ダム建設の是非についての判断を表明する。
- 有識者会議の役割
知事が川辺川ダム問題について判断する材料の一つとするため、川辺川問題を巡る様々な課題について、専門分野からの科学的・客観的な意見を述べる。

有識者会議における議論

- 有識者会議の議論の方法
 - 住民討論集会等における論点・争点の分析
川辺川ダム計画を巡る諸課題(治水、環境、財政的課題、地域振興等)の論点・争点について、主に、「住民討論集会」における論点の整理と、それらが河川整備基本方針を審議する「検討小委員会」でどのようにとりまとめられたかを中心に、当時の資料を確認しながら、分析・議論した。
 - 現地調査と地元の意見の聴取
それら争点となった場所等について、アドバイザーのブラウン氏とともに、2日間にわたり、現地の実際の状況等を調査、確認した。
また、川辺川ダム建設を求める地元首長、川辺川ダム建設に反対する住民団体双方の意見を直接聴き、質疑を交わした。

2 有識者会議の基本認識

- 治水対策の必要性
球磨川流域は、地形的に水害の危険性が高い特性を有しており、毎年のように水害が発生し、深刻な被害が生じている。
球磨川流域における治水対策の必要性については、ダム建設の賛否にかかわらず、県民の間でコンセンサスが形成されている。
- 環境保全の重要性
球磨川流域には豊かな自然環境が残っており、地域の人々は「清流球磨川」「清流川辺川」を地域の宝、シンボルとして大切にしている。
河川利用に関しても、人々と川とのふれあいが盛んであり、地域づくりにおける「球磨川・川辺川」の持つポテンシャルは高い。
- 地域振興
- 財政的課題

3 「これまでの議論」(有識者会議以前の議論のまとめ)

(1) 住民討論集会における議論

		反対側	国土交通省 推進・容認側
治水	基本高水 (森林の保水力)	・人吉地点で5500m ³ /s (森林の保水力):浸透能が高ければ、ピーク流量を削減できるなど一定の洪水調節機能を発揮。本来の手入れをすることで、浸透能が改善され、保水力が増大する可能性が高い。	・人吉地点で7000m ³ /s (森林の保水力):森林の保水能力は200ミリくらいで頭打ちになる。森林に過度の洪水緩和機能を期待するのは危険。
	計画高水流量	・人吉地点で5400m ³ /s 市房ダムでの調節を含め5600m ³ /s	・人吉地点で4000m ³ /s
水	最大洪水流量への対処	・体系的代替案...人吉地点では、計画河床高までの河床掘削を行い、未整備の堤防を整備 ダムなしで最大洪水流量への対応が可能	・ダム案...既存の市房ダムと新規に造る川辺川ダムで3000m ³ /sをカット 川幅の拡幅や河床掘削、堤防嵩上げは社会的、環境的に困難
環境		・他ダムの事例から、川辺川ダムが水質や流量、魚族、八代海、希少生物に与える影響は大きいと考えられる。 ・選択取水設備や清水バイパスについては十分な効果は期待できない。	・ダム建設により環境に全く影響が出ないとは言えないが、ダム反対派が主張する環境への致命的影響が生じることはない。 ・環境保全のために、選択取水設備や清水バイパスなどの対策を講じるとともに、流量や魚族等に配慮し運用する。

(2) 検討小委員会における議論と河川整備基本方針で定められた事柄

治水	基本高水 (森林の保水力)	今後の森林の保水力向上は現時点では期待できず、現在の一般的な方法で計算し、その結果を様々な方法で検証した結果、人吉地点では7000m ³ /sが妥当。
水	計画高水流量	社会的・環境的影響から、川幅の拡幅や河床掘削には限界があり、人吉地点では4000m ³ /sが妥当
環境		良好な河川環境の整備と保全に努めるとともに、河川工事等により河川環境に影響を与える場合には、代替措置等により、できるだけ影響の回避・低減に努め、良好な河川環境の維持を図る。

4 有識者会議における議論の方向性

(1) 「これまでの議論」についての整理

基本高水や森林の保水力は、治水計画の基礎となる数値であることから、最も大きな争点の一つとして、これまで「数値の正しさ」に力点をおいた議論が行われてきた。

しかし、これまで争点となってきたこれらの数値については、例えば基本高水の算出に当たっては、いくつかの幅のある数値の中から平均値や安全側の数値を選択する、また、森林の保水力については、地質や地形、森林の状態等の条件により働きが異なるため一律の評価はできないなど幅や不確実性を含んでいることが指摘された。

(2) 有識者会議の議論の方法

そのため、本会議では、これまでの議論のように数値の正しさを議論するよりも、むしろ、数値に幅や不確実性があることを前提とし、その幅の中のいくつかのケースについて、それぞれどのようなメリット、デメリットがあるのかトータルに議論することとした。

(3) 新たな視点・要素等

1) リスクの評価(リスクと便益のバランス)

治水安全度を超える場合のリスクをどう考えるか、治水安全度を下げた場合に発生する治水面のデメリットと環境面のメリットのバランスをどう判断するのか、といったリスク評価の視点で、具体案を評価した。

2) 地域の将来像

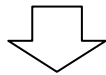
地域の将来像はどうあるべきか、そのためには今どのようなことが必要か、といった将来像を見据えた視点で、具体案を評価した。

3) 将来予測(地球温暖化に伴う気候変動)

過去から現在までのデータを基にした議論だけではなく、できる範囲で、将来予測を視野に入れて議論をすることとし、特に、地球温暖化に伴う気温上昇と雨の変化(量、強さ)について、方向性を検討するに当たっての重要な要素とした。

4) 地域・社会全体での防災システム

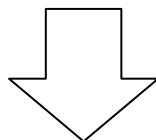
少子高齢化の進展、人口減少等の社会変化を踏まえ、災害弱者を守るためのソフト整備とハードとの定量的役割分担といった防災システム、あるいは、水田を活用した流域全体での防災対応等についても検討することとした。



(4) 有識者会議で出された意見

会議資料2 - 2「有識者会議におけるこれまでの意見」参照

会議での共通認識



有識者会議の意見

Blank area for the meeting opinions.